
魔法老婆 うめこ マギカ

まどろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法老婆 うめこ マギカ

【Zコード】

Z9675Z

【作者名】

まじろみ

【あらすじ】

魔法少女ばかりにスポットが当てられ、魔法おっさん、魔法老婆、魔法オカラマ等が忘れされている世の中。魔法おっさん、魔法オカラマは書けないけど、魔法老婆だったら書ける……魔法老婆の魅力を書こうではないか。っていう感じのお話です。

キュベえ、頑張る（前書き）

勢いで書いた。

反省はしているが、後悔はしていない。

キュウベえ、頑張る

「僕と契約して魔法少女に……」

キュウベえが途中で言葉を止めてしまったのも仕方ない。

皺々の手。真っ白な髪。

どこをどう見ても、少女と言つには無理があつた。

どれほど、お世辞を駆使したとしても、キュウベえのもつ話術を駆使したとしても、彼女を少女と称する事が出来なかつたのだ。

一体、上は何を考えているんだろうか？

エントロピー云々のためには、少女という感情の上下が激しいエネルギー源のほうが効率的なのだ。

田の前を見てみる。

老婆だ。

「……僕と契約して、魔法老婆になつてよ」

さて、ここで一つ問題が発生するのだ。

もし仮にだ。

仮にこの契約がなつたとしよう。

魔法少女のコスチュームについては、総じて可愛らしく、ちょっとばかり露出度が高いものがある。

それなのだ。

それを、彼女、山田 梅子に着せるとこいつ暴挙は大きすぎる問題であろう。

杖を持ち、「リリカル むにゅ むにゅ」などと、もし唱えたら暴動が起きる。

キユウベえは感情が無いから大丈夫……なのだらうか?
好奇心が湧く議題だが、リスクが高すぎる。

「え~と、聞こえる?」

僕と契約して、魔法老婆になつてよ」

どうやら、キユウベえは吹つ切れたらしき。
たくましく、勧誘を続いているのだ。

「ああ、貴子さん。

今日はいい天氣ですねえ」

「う、うん、いい天氣だね。

あと、僕貴子さん? じゃなくてキユウベえってこいつなんだ」

「やうですねえ、貴子さん
お風まだなんですよ」

ちなみに、もう夕方である。

「いや、僕は貴子さんじゃなくて」

「いい天氣ですねえ」

「う、うん、いい天気だね」

ある意味キュウベえにとつての天敵といつていい存在だった。キュウベえが得意とするのは、話術や自分には分かりもしない感情とやらに訴える物なのだ。

それが、全く出来ないのだ。

「じゃ、貴子さん

料理お願いしますね」

「……え？」

「ワケが分からぬよ。

本当にワケがわからぬよ。」

本当であれば、コレをお願いとし、梅子さんを魔法老婆にしてしまうつもりだったのだ。

だが、いかんせん幾つもの問題がある。

1つ、ただのお願いであり、代価として魔法老婆になると明確に言つていない。

2つ、会話が成立していない。

3つ、そもそも、キュウベえと貴子さんなる人を間違えている。

4つ、あれ？これ無理じゃね？

である。

そのお願いなど、無視すればいいのだが、料理を作らなかつた事によつて、この老人が飢えて死んでしまうといつ可能性が少なからずあるのだ。

この豊かな国では、ほとんど無ことはいえ、可能性が〇といつわけではない。

魔法老婆になるまえに、死なれては困るのだ。

それで、適当な物ジャンクフードでも渡ハンドルそうかとしたのだが、それにより身体に変調をきたす可能性も考慮しなくてはならない。

なにせ相手はお年寄り、食事には気を使わなくてはならない。

餅等を喉に詰まらせ無くなる、といつのも非常に多いのだ。

そうなると、出来るだけ健康的な料理、つまり手作りのものとなつて来る。

身体が見えない、といつよりも4本足であるキュウベえにとつてコレほど難易度の高い問題を取り扱つた事などなかつたのだ。

案外何とかなつたが……

だが、キュウベえの戦いはまだまだ始まつたばかり。

たかが食事など四天王の中でも最弱。

浴槽、トイレ、洗濯。が待つているのだ。

頑張れ、キュウべえ。

負けるな、キュウべえ。

果たして、キュウべえの営業は成功するのだろうか？

「貴子さんや、いい天気ですねえ」

「う、うん、いい天気だね」

キュウベえ、ひらめく

「そりか、答えは簡単だつたんだ」

梅子（88歳）との契約という無理難題を上から命じられ早3ヶ月目。

だんだんと、料理の腕前が上がってきた頃によつやくキュウベえは梅子との契約方法を思いついたのだ。

「僕が貴子さんになれば良いんだ！？」

3ヶ月もの間、考えた結果だつたのだ。

彼が梅子との契約がなせなかつた理由は以下の通りである。

- 1つ、ただのお願いであり、代価として魔法老婆になると明確に言つていな。
- 2つ、会話が成立していな。
- 3つ、そもそも、キュウベえと貴子さんなる人を間違えている。
- 4つ、あれ？これ無理じやね？

以上の4つによつて彼は契約出来なかつたのだ。

だが、だ。

だが、キュウベえが貴子さんとなつたらどうだらうか？

一気に話の一貫性がとれ、契約することが出来るのだ。

もちろん、やつてゐる事は詐欺その物。許されざる行為ではあるのだが、その辺を華麗にスルーするのがキュウベえなのだ。

「ところ訳で、僕は今から貴子さんだ」

堂々と梅子に宣言する。

なお、『』の『キコウベえを認識しているのは梅子以外居ない、といつ点から考えるに梅子本人が了承したらキコウベえといつ存在が貴子さんなる存在になりえる。

とか、良くなづけの分からない言い訳がキコウベえの頭の中で渦巻いているのだが、それはどうでもいいので略。

「はいはい、分かりましたよ」

梅子の了承を取ることも完了した。
これで、ようやく契約出来るのだ。

キコウベえ、改め貴子さんは感情のないくせに感涙しきりになつていた。

たつた3カ月とはいって、彼にとつて苦労の連續。
四本足だといつのに、料理をしたり、浴槽の準備、梅子が足等を滑らせない様に、見張り。

転びそうになつた時は、その身を犠牲にし、助けたのだ。

だが、ようやくその苦労も終わる。

「じゃ、梅子。

改めて言つよ。僕と契約して魔法老婆にならうよ

今までの苦労を噛み締めながら、キコウベえは泣き泣き泣きついた。

これで、もし何か適當な言葉。

例えば、『貴子さん、料理をお願いしますね』等の言葉でも、契約をするから、代わりに料理をしてくれという意味に歪曲して理解する事も不可能ではない。

明らかに、意思の疎通が出来ていないが、キュウベえの中ではOKなのだ。

「料理、お願ひしますね」

勝つた……

ついに、キュウベえは勝つたのだ。

100を超えて、数えるのをやめた「ワケが分からぬよ」もこれ以上言わなくて済むのだ。

感情がないはずのキュウベえの胸の内に宿る、達成感にも似た何か

⋮⋮⋮

それを噛み締

「ジョセフィーヌさん」

「なん……だと……」

「僕は今からジョセフィーヌさんだ」

「はいはい、分かってますよ。ライダーさん」

「僕は今からライダーさんだ

「はいはい、分かっていますよ。翔太さん」

「ゼえゼえ……

分かった。僕は今日からじゅげむじゅげむ「」のすりきれかいじ
やりすいざよすいぎょ……って、あああああ。
なんだい、この名前は！？

もうこい。何でもないよ

「そうかいそうかい……
所で、お皿はまだかい？」

「今から準備するよ」

ため息を吐きながら、料理をしようとする。

もし彼の表情が動くのであれば、きっと苦笑を浮かべているのだろう。

感情を知らないキュウベえは気付かない。自分が安堵している事に。

「よろしくね。
キュウベえ」

「……え？」

振り向くと、一いつ瞬しゆく梅子の顔が見えるだけだ。

「梅子、今僕の名前を……」

梅子は一いつ瞬しゆく笑みを浮かべたながら、キュウベえを見つめるだけ。
キュウベえは首を傾げながら台所へと向かったのだった。

まだまだ、今日は始まつたばかり

頑張れ、キュウベえ。
負けるな、キュウベえ。

キュベヌ、ひひめく（後書き）

めつせひで書いてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675z/>

魔法老婆 うめこ マギカ

2012年1月8日22時45分発行